

過疎地域における「ローカルベンチャー」誕生とその支援

—北海道厚真町の事例より—

研究員 大友 和佳子

目次

- | | |
|--------------------|-----------------|
| 1. はじめに | 4. ローカルベンチャーの誕生 |
| 2. 北海道厚真町概要と移住定住支援 | 5. おわりに |
| 3. ローカルベンチャー支援概要 | |

1. はじめに

2014年、内閣官房に「まち・ひと・しごと創生本部」設立準備室が発足し、地方の人口減少に対する中長期ビジョンが策定された。

しかし、その方法論については各自治体の努力が求められており、試行錯誤が続いている。そこで本稿では、特に産業面に焦点を絞り、全国各地の過疎と言われる企業誘致が難しいとされる地域で、新しい産業としての「ローカルベンチャー」¹が誕生していることに注目したい。

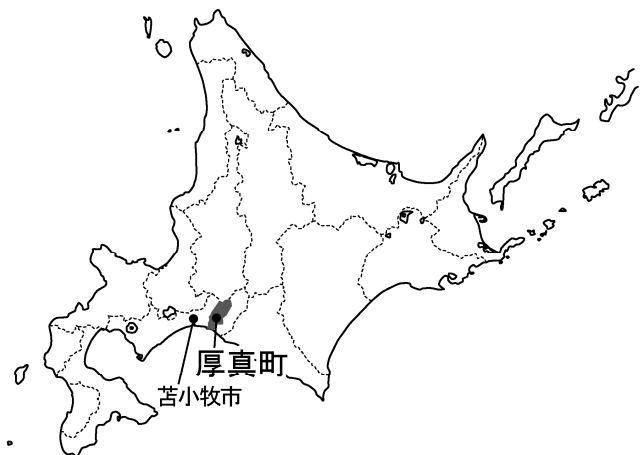
本稿では北海道厚真町²を事例とし、「ローカルベンチャー」の誕生と支援方法について述べた。

2. 北海道厚真町概要と移住定住支援

北海道厚真町は新千歳空港から車で40分の立地にある。中心部は厚真地区で、苫小牧東部地域は1980年（昭和55年）以降開発が進んでいる。

苫小牧市との境に苫小牧東港が作られたほか、道内最大規模の火力発電所北海道電力苫東厚真発電所や石油備蓄基地（国家・民間備蓄量は国内最大）が置かれている。農業は稲作が中心で、胆振管内では随一の作付面積を誇っている。また、稲作以外では、ハスカップが日本一の作付面積となっている。

（図1）厚真町地図



1 「ローカルベンチャー」とは2015年に牧「1」が提唱した言葉で、地域資源を活用し、地域の潜在的可能性を引き出すビジネスを指す。

さらに現状では、事業のみならず、事業を実施する起業家や、営利を目的としない地域活動へのチャレンジについても、広義に「ローカルベンチャー」という言葉が使用されている。

2 内閣府の「まち・ひと・しごと創生本部」は、2017年「移住・定住施策の好事例集（第1弾）」[2]を発表し、3大都市圏以外から、行政・民間の取り組みによって転入者数から転出者数を差し引いた社会増減数を始点年の総人口で割った「社会増減率」がプラスに転じた、または社会減の減少幅が縮小した自治体を選定し全18自治体を紹介した。厚真町もその18自治体の一つとして紹介されている。

人口の推移を図2に示した。

厚真町の人口は、1980年に6,817人であったが、その後減少傾向が続き、2010年に5,000人をきっている。この頃から、本格的な移住・定住施策が始まっている。

具体的には、住宅斡旋による移住促進が主で(1)子育て支援住宅による移住促進、と、(2)分譲地を整備し販売の2つの政策がある。子育て支援住宅とは、町外から厚真町に移住することや小学生以下の子を1名以上扶養していることを条件に入居可能で、扶養する18歳以下の子供1人につき家賃を5千円控除するという支援策である。

また分譲地を整備した販売は、「森林に囲まれた環境」「市街地に近接」「海に近い」「小中学校に隣接」など、それぞれに特徴のある分譲地を整備して移住希望者のニーズに合わせて販売するという施策である。また、土地を売るだけでなく、住宅を新築する費用の一部(上限200万円)を補助し、さらには移住を検討している方が見学などに来る際の交通費・宿泊費も一部補助するなど積極的な移住促進策を行っている。この2つは

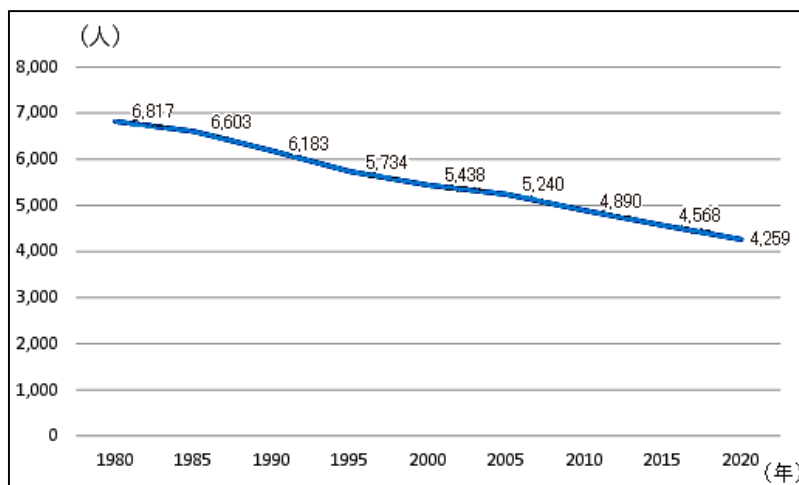
- ・子育て支援住宅への移住者数：
15世帯 62名 (2014年～2016年)
 - ・分譲地への移住者数：30名 (2016年)
- といった成果を生み出した。

しかし、こうした施策のみでは、経済循環を生みだすまでにはつながらず、次なる施策として「ローカルベンチャー支援」が誕生した。

3. ローカルベンチャー支援概要

厚真町におけるローカルベンチャー支援は、2016年に始まり(表1)、支援主体は自治

(図2) 厚真町の人口の推移



(出所) 厚真町資料より筆者作成

体と中間支援組織 株式会社エーゼロ厚真である。自治体は主に土地や空き家の斡旋、人間関係の調整などを担当し、中間支援組織は経営ノウハウのサポート、地域外のネットワークの形成などを担当している。

ローカルベンチャーはローカルベンチャー育成機関である「ローカルベンチャースクール」で選抜され、選抜されたローカルベンチャー達は、地域おこし協力隊の制度を活用しながら、3年をかけて厚真町で事業の立ち上げを行う。

「ローカルベンチャースクール」では、自身のやりたいことの掘り下げや、事業運営方法のメンタリング、先輩起業家とのネットワークづくりなどのサポートがあり、開業した後も困った時は相談にのってもらえるコミュニティとして機能している。

ローカルベンチャー達が集まり、地域内で新しいチャレンジが広がる中で、他の企業が厚真町に注目をし事務所を移転するなどの変化も起きている。チャレンジをする地域の象徴として「ローカルベンチャーの動き」が展開されていることに注目をしたい。

(表 1) 厚真町におけるローカルベンチャー支援と概要

年度	ローカルベンチャースクール (LVS) に関わる状況	地域おこし協力隊委嘱人数 ※LVSの翌年の4月に協力隊として委嘱	企業研修型地域おこし協力隊 ³ ※2020年より開始	地域おこし企業人 ⁴ 委嘱人数 ※LVSの翌年の4月に企業人として委嘱	事業内容		
					ローカルベンチャー (L V)	企業人	企業研修型協力隊
2016	ローカルベンチャースクール (LVS) 開始。	—	—	—	—	—	—
2017	LVSに加え、起業プランを協力隊となり厚真に移住してから考えるプログラムを試行。本プログラムは2017年のみで終了。	2	—	1	馬を活用した農林業 貿易業・国内食品流通業	町と町外の事業家とのマッチング	—
2018	北海道胆振東部地震発災。LVSの中止を決断後、LVSの意義を確認後に改めて再起動を決定。	3	—	0	訪問美容 デザイナー・クリエイター カレー製造	—	—
2019	LVS最終審査通過者が初めて0人。 ※2020年の協力隊委嘱人数が0人。	3	—	1	製材及び林業 介助犬の繁殖業 車の乗り合いサービスの開発	農業と馬を活用した事業の開発	—
2020	先輩L Vが厚真にいるからLVSへエントリーした、という応募者が初めて発生。人が人を呼ぶ流れの端緒が見え始める。 企業研修型地域おこし協力隊の開始。	0	4 (内1名退任)	1	—	森林の調査及びコンサルティング	タウンプロモーション・イベント等の企画運営 (2021年3月に退任) ファームレストランの調理担当 農作物加工業の企画・広報 畜産ベンチャーの広報・海外展開の企画
2021	L Vの下に企業研修型地域おこし協力隊が入り始める。 2021年度のLVSは10月、12月で実施予定。	4	5 (内1名退任)	0	キャンプ場開発と運営 映像制作 林業・森林を活用した事業創出 競走馬の購入マッチングサイトの開発	—	馬を活用した事業開発 馬を活用した農林業 農作物加工業の企画・広報 丸太流通業 農作物加工業の企画・広報

(出所) ヒアリングにより筆者作成

4. ローカルベンチャーの誕生

それでは、次に誕生しているローカルベンチャーを3事例紹介する。

(1) 西埜馬搬—西埜将世氏

1) 西埜馬搬概要

まず、馬搬を活用した林業を行う西埜将世氏(40歳)を紹介する。「馬搬」とは、馬の力を利用して、山中で伐採した木を運び出す作業である。

馬搬は明治時代に入ってから馬産地である北日本を中心に盛んに行われていたが、林業の機械化が始まった昭和30年頃から、衰退し始めた。西埜氏は現在、妻と2人の娘とともに北海道厚真町で暮らし、「西埜馬搬」を営ん

でいる。

西埜氏が、馬搬に注目するのは、自然生態系の保全の観点からである。

機械化した林業では、重機が移動する作業道を作る必要があり、そのため、多くの木が伐採され、山の斜面が削られる。重機が何度もその道を通るので、土は重みで締め付けられ、跡も残る。一方、馬は、どんな場所でも移動でき、険しい斜面でも自由に昇り降りできる。馬のフンは自然の循環のなかに組み込まれ、もちろん排気ガスは出ない。馬搬は圧倒的に自然に優しく、馬が森を歩くことで子供たちとの触れ合いが生まれるという効果もある。

3 「企業研修型地域おこし協力隊」とは、企業の下に配置され、受け入れ事業者とともに事業を創っていく制度である。

4 「地域おこし企業人」とは、民間企業に所属したまま地域に入って活動できる制度である。

(写真1) 馬をひく西埜氏



(出所) 西埜氏より提供

(表2) 西埜馬搬 データ

会社名	西埜馬搬
所在地	〒059-1622 北海道勇払郡厚真町宇字隆285
代表	西埜将世
事業内容	馬を活用した林業
設立/資本金	2017年4月1日/なし
従業員	1名
売上高	750万円

(出所) ヒアリングにより筆者作成

(写真2) 馬と子供たち



(出所) 西埜氏より提供

2) 地域への効果

地域への効果としては、あつま森林むすびの会として、某会社の社有林の森林整備をし、間伐材をほだ木として、しいたけ農家に販売するなど地域の他の一次産業との関係を深めている。また、教育委員会と連携して週1回

放課後児童クラブの活動の場ともなっている。馬搬を活用した新しい林業に興味を持つ大学生、高校生などが他県から訪れることも多く、他地域から人を呼び込むことにつながっている。

(2) GOOD GOOD株式会社—野々宮秀樹氏

1) GOODGOOD株式会社概要

GOODGOOD株式会社は、地域資源を循環的に継続させる放牧による牧草と牛の一貫生産牧場、精肉店、飲食店、卸売業などをワンストップで経営する会社である。創業者は野々宮秀樹氏(42歳)で、1978年和歌山県出身、元金融職である。

野々宮氏の事業のポイントは、畜産業界への異業種参入であること、海外輸入の飼料に頼った畜産の在り方から、放牧による地域資源の循環の中での畜産経営に転換させている点である。

(表3) GOOD GOOD株式会社 データ

会社名	GOOD GOOD株式会社
所在地	〒532-0003 大阪府大阪市淀川区宮原1-1-1 3F
代表取締役	半田光正
事業内容	畜産業 生体を含む肉製品の製造・加工・小売・卸売・輸出入業 GOODGOODMEAT、その他店舗の開発・運営 事業企画の立案、コンサルティング業
設立/資本金	2018年7月27日/2.6億円
従業員	35名
売上高	1.3億円

(出所) ヒアリングにより筆者作成

2020年4月1日には、国内外での和牛振興を目的に、国内全和牛種すべて(4種)を一貫飼育し、商談も現地でおこなえる、世界初の滞在型生産商談施設「和牛メゾン(Wagyu Maison)」構築のため、北海道厚真町と用地の賃借に関する長期契約を締結している。

(写真3) 調印式の様子



(出所) 野々宮氏より提供

2) 地域への効果

地域への効果は、次の通りである。日本の畜産は、生産と販売が分離していることが一般的であり、顧客ニーズの生産現場へのダイレクトな伝達や、生産情報の顧客への高度な情報伝達が実現しにくい状況になっていた。

そこを飼料栽培から精肉レストラン経営、卸売業までをすべて自社で行うしくみにし、和牛生産、なかでも牧草和牛生産のすべてを体系的に見学、理解できる施設を構築し、国内外のバイヤーや消費者などに自然体験を通じ生産情報を開示するしくみを構築した。

こうしたしくみを、地域に浸透させ、地域における生産者と消費者がつながった新しい和牛文化の確立をねらっている。

(3) 株式会社たのしいー堀田祐美子氏

1) 株式会社たのしい 概要

次は、原木しいたけを食卓に直接届ける販売の会社を立ちあげた堀田祐美子氏（42歳）を紹介する。堀田氏は2018年に厚真町の起業支援に関する補助制度などを利用し、会社の立ち上げに至る。

その背景には、農家に嫁ぎ初めて原木しい

たけ栽培の世界に触れる中で、手間をかけて作っている原木しいたけの価格が下がり担い手が減少している現実を知ったことがある。そこで、堀田氏は、原木しいたけの生産現場の情報をHPや交流を通して消費者に伝えながら、直接に販売する会社を立ち上げた。

(写真4) 堀田祐美子氏



(出所) 堀田氏より提供

(表4) 株式会社たのしい データ

会社名	株式会社たのしい
所在地	〒059-1623 北海道勇払郡厚真町新町37-1
代表取締役	堀田祐美子
事業内容	農産物の加工・販売・およびこれらの受託
設立/資本金	2020年1月31日/2,000,000円
従業員	2名
2020年度売上高	1,728,198円

(出所) ヒアリングにより筆者作成

2) 地域への効果

堀田氏が消費者に伝えたいことは、自然(特に林業)との循環の中で、人の丁寧な手をかけながら作る原木しいたけの価値である。その価値を伝えるためにHPの充実、直接に消費者と交流する機会を設けるなどの工夫をしている。

現在の課題は、加工品などの商品ラインナップが少ないので増やすことである。さらに今後の展望は、自家農園の農産物だけではなく厚真町で生産されている他の農産物の販売

も行うことである。

地域において原木しいたけ農家と消費者が
つながる場を創造することで、新たな農業の
価値の提案を目指している。

（写真5）子供たちとの交流イベント



（出所）堀田氏より提供

5. おわりに

以上、本稿では北海道厚真町におけるローカルベンチャーの誕生と支援について紹介した。ローカルベンチャーの動きが「チャレンジをし続ける地域」の象徴となり、様々な人を呼びこむ要因となっている点に注目をした
い。

今後、これらのローカルベンチャーの動きが、
地域の経済循環にどのような効果をもたらすの
かについて、今後の展開を注視していきたい。

（参考文献）

- [1]『ローカルベンチャー』（2018）牧大介、
株式会社木楽舎
- [2]「移住・定住施策の好事例集（第1弾）」
[https://www.chisou.go.jp/sousei/pdf/
ijyu-jirei-1.pdf](https://www.chisou.go.jp/sousei/pdf/ijyu-jirei-1.pdf)

（謝辞）

インタビューでお世話になりました厚真町
役場の方々、ローカルベンチャーの方々に心
より御礼申し上げます。